

第 5 3 号

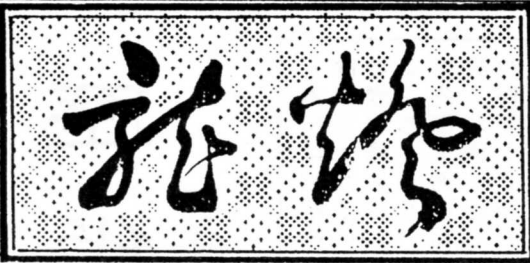
大阪市史跡 龍溪禪師墓所 雲屯山九島院

発行所

〒 550-0022 大阪市西区本田3丁目4番18号
TEL 06(6583)2725 FAX 06(6583)0908

発行者

第二十五世住職 奥田啓知(智證)



お寺が栄えることは檀信徒の喜びであり

不二家の危機

ペコちゃん泣いている

ペコちゃん人形で知られる大手菓子メーカーの不二家が窮地に立たされています。消費・賞味期限切れ原料の使用や、さまざまな品質管理が相次いで発覚しました。雪印食品をはじめ、食品会社の食中毒や偽装問題が相次ぎ、食の安全を第一とする食品会社が、消費者の信頼を裏切ると、経営が成り立たないことは、自明の理であること知りながらも、その教訓を生かせませんでした。クリスマス商戦を目前とした昨年十一月に埼玉工場で賞味期限切れを認識していたながら公表を避け、その後不祥事の公表を小出しにした挙げ句、続々とその隠蔽事実が判明しました。事態の深刻化をうけて藤井林太郎社長は会見で、責任をとって辞任する意向を表明しました。「莫妄想(まくもうそう)という禅の言葉があります。中国・唐の時代の禅僧の無業(むごう)禅師の言葉です。莫妄想とは、「妄想するなかれ」ということで、「人間が考えてもわ

からないことを、あれこれ考えるな」ということです。それは裏返しに言えば、人間を越えた『ほとけの教えを信ずる』ことなのです。ほとけの教えを、時間、空間を超越した永遠の真理と信じて、その教えのまま生きるのが仏教者として幸福な生きかたなのです。今回の不二家の問題についていえば、仏教でいう「利他行」(他人のためにする活動)としての食品の製造・販売活動の原点を逸脱したところから生じた問題といえます。利益を得ることは、企業として当然のことですが、消費者に喜ばれる食品を製造・販売するそしてそれを行った結果として利益が生じるのです。不二家の創業者の藤井林右衛門は、明治四十三年に横浜で洋菓子店を開くにあたり、富士山のように日本に二つとない立派な店になるようにと『不二』家と名付けたといえます。「はじめからソロバンずくでは、製品は作らない。ただ、よ

い製品さえつくれば、ソロバンの方は自然とあってくれるものだ」とは、創業者の言葉です。まさに、ほとけの教え「利他行」の原点ともいえるべき、不二家の経営方針が、洋菓子の老舗(しにせ)として、お客に愛されてきたのではないのでしょうか。現社長の藤井林太郎氏はその創業者の孫、お祖父さまの教えをいま一度思い返し、不二家の再建に力をつくすべきです。多くのペコちゃんファーンのためにも。コンプライアンス(法令順守)食の安全基準)が叫ばれるなか、モラルまで金儲けのために踏みまじられて不二家のペコちゃんも泣いていることだと思



歴代是嚴修

導師は塔頭院主を拝請

本年は当院の先代弘忠和尚の十三回忌と先々代栄忠和尚の五十回忌に正當します。四月十四日(土)に両和尚の歴代忌を予定しております。檀信徒の方々にご参詣賜るべきところ、諸般の事情で、当院檀信徒総代の方々と宗内御大徳の和尚様(導師大本山塔頭萬松院院主中島義晃大和尚)十二名を拝請して挙行いたします。両和尚様の履歴をご紹介します。

第二十三代栄忠和尚

姓は奥田、明治二十二年二月十日、愛知県中島郡千代田村、現在の稲沢市奥田町の農家の二男として出生。父は奥田栄左エ門、母リツ。明治三十二年三月、十一才の時、当院にて省己和尚の弟子となる。本通尋常高等小学校、黄檗宗普通学校を経て、明治四十一年四月に奈良法隆寺勸学院において仏教学を修めた。同所では曹洞宗の傑僧沢木興道老大師と共に励み、以後老大師遷化まで、親交を続けられた。

明治四十五年七月、省己和

尚の引退に伴い二十三代住職になられ、同年十一月五日晋山式を挙行された。黄檗宗宗務所長、宗會議員審議委員を歴任するかわら当院の経営に邁進された。



お寺が栄えることは檀信徒の喜びであり

当院への貢献については、先代和尚が龍燈第九号に詳記されているが、大正八年五月一日より四日間、開山龍溪禪師二百五十年大遠忌を黄檗四十六代大雄親下を拝請の下に執行。昭和十四年五月四日黄

第二十四代弘忠和尚

大正六年七月三日、当院の長男として、父栄忠、母フサ(後の世界長シューズの社主藤本家の次女で、安治川地区の檀家高橋家や鈴木家の世話で縁付く)の下で生誕。七才で黄檗宗管長星野直翁親下に就いて得度。本田小学校、旧制市岡中学校(同校では列長を勤めた)大谷大学文学部卒業の後、黄檗禅堂に掛錫修行。昭和十七年より二十年まで南洋ラバウル方面で兵役を勤め二等兵として辛酸をなめる。復員後、鶴見橋の公立中学校教員、縁あって私立清風高校の夜間部の教師として勤務。師父栄忠和尚の伊丹常休寺(姉發子が嫁ぎ、夫弘道和尚はファイルピンで戦死)住職転任の後をうけ、昭和二十三年一月当院住職に就任。二十五年十月二十三日、現今の本堂再建落慶法要を兼ね晋山式を

昭和三十九年には、朱塗り

築四十八代義道親下拝請の下に一日受戒会執行。とりわけ大東亜戦争での壊滅的被害、ジェーン台風での高潮来襲による重要物品流出などの困難を乗り越えを重興された功績は偉大なるもの。

の龍宮門をコンクリート製で復元(施工檀家池野工務店)境内墓地造成や庫裡増改築など鋭意、当院運営に心を砕かれ、復興発展に尽くされた。宗内でも布教師や教学諮問委員、座元検定委員、宗務支院長を勤め、大本山塔頭萬松院、常休寺、松源寺、久安寺などの住職を兼務された。晩年、アルツハイマー病を発症したが、戦役での苦勞を偲び、『椰子の実』を月参りで歌っていた。小柄にとつて人生の命題を戴いた大恩師である。



